星のひとみ

サカリアス・トペリウス作　万沢まき訳

岩波書店

星のひとみ

トペリウス作　万沢まき訳　丸木俊絵

949 星のひとみ

サカリアス・トペリウス作

万沢まき訳

岩波書店 1965

220 p. 22 cm (岩波ものがたりの本 4)

小学2, 3年以上

Zacharias Topelius: Läsning för barn, 1865.

岩波ものがたりの本 4

■星のひとみ　定価一〇〇〇円

一九六五年七月十五日　第一刷発行 ©
一九七六年四月二十日　第九刷発行

訳　者　万沢まき
絵　　丸木俊
発行者　東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五
　　岩波雄二郎
発行所　101 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五
　　株式会社岩波書店
　　電話〇三―二六五―四一一一　振替東京六―二六二四〇
本文印刷　大日本法令印刷株式会社
製本　文勇堂製本工業株式会社
表紙・箱・口絵・見返印刷　錦印刷株式会社
落丁本・乱丁本はお取替いたします

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

もくじ

よい子どもたちに……9
スイレン……13
サンポー・ラッペリルの話……29
アリとお医者さま……59
星のひとみ……69
白いアネモネ……95
赤いくつ……105

夏至の夜の話……123
ウンダ・マリーナの足あと……137
古い小屋……147
霜の巨人……178
雲の中のかじやさん……197
訳者のことば……213
口絵　夏至の夜の話（丸木　俊絵）

星のひとみ

トペリウス作　万沢まき訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

よい子どもたちに

フィンランドの森に、一羽の小鳥がいました。その小鳥は、マツや、モミや、シラカバや、ナナカマドたちのために、歌をうたいました。草原のフウリン草がその声をきき、川岸のアシが、その歌に耳をかたむけました。小鳥のほんとうのふるさとは、ひろいあれ野でした。大空の雲がきょうだいで、青白いヒースがゆりかごで、風と歌が、子もり歌でした。

すると、あるとき、天使が森にきて、その小鳥にいいました。

「子どもたちのために、歌をおうたいなさい！」

小鳥はいいました。

「わたしの声は、こんなに小さいのですが、子どもたちにきこえるでしょうか？」

天使はいいました。

「心のそこからおうたいなさい。そしたら、子どもたちにもきこえますよ。」

「なにをうたったら、いいでしょう？」と小鳥はたずねました。

天使はこたえました。

「歌とものがたりを、そして、神さまのみさかえをおうたいなさい。神さまのかぎりない、おちからと、

おめぐみを、おうたいなさい。大自然の美しさと、神さまのかしこさを、おうたいなさい。神さまのおこころが、どんなふうに、この世界にいっぱいになっているかを、おうたいなさい。そして、地上のよいものや、神さまをうやまうことや、まごころや、勇気や、ただしさや、つつしみや、やさしさなどについても、おうたいなさい。自由に、たのしくおうたいなさい。くらいかなしみのなかにさえ、さしこんでくる日の光をおうたいなさい。けれども、いつもこころをこめて、うたうのですよ。」

小鳥はいいました。

「やさしい天使さま、わたしはよろこんで、おのぞみどおりにいたしとうございます。でも、わたしがこの大きな森にいる、何千羽という鳥のなかの、ごくつまらない鳥だということを、あなたは、ごぞんじのはずです。子どもたちのために歌をうたうという、りっぱなつとめをやりとげる力を、だれがあたえてくれるのでしょう！　子どもたちは、神の国のものではありませんか。それなのに、つばさはよごれ、心はあらしのようにおちつきのない、このわたしにむかって、神さまにえらばれた子どもたちに、はなしをせよと、おっしゃるのですか？」

天使はこたえました。

「おまえひとりの力では、なんにもできないのです。おまえが雪のように白いからだと、ゴクラクチョウのようなおもおもしい声と、ナイチンゲールのようなやさしい声をもっていて、この世のはじめから、朝やけの歌をうたってきたとしても、それは神さまのお力によることです。ですから、ひとすじに神さまにおす

がりして、おまえのしごとをやりとげなさい。」

小鳥はいいました。

「おっしゃるとおりに、いたしましょう。」

そして、小鳥はうたいました。

さて、よい子どもたちよ、その小鳥の歌とものがたりは、フィンランドの森から、かるいわた毛のように、あなたがたのもとにやってきました。それは、春風が、はこんできたのです。よい子どもたちよ、木のえだや、葉に、サラサラと鳴っていることばに、しずかに、耳をかたむけてください。

一八六六年十月五日

ヘルシングフォルス（ヘルシンキのスウェーデン名）にて

サカリアス・トペリウス

夏、あの遠くの小さい島に、いってみたことがありますか？　あの島では、美しいシラカバが風にゆれ、水は、底の白いすなの上を、お魚がおよいでいるのが見えるほど、すみきっています。あそこにいったことのあるひとは、きっと、海岸のあの大きな灰いろの岩や、岩の根もとにさいている白いスイレンを見たことでしょう。まいにち、夕がたになると、からだをちぢめて、青い葉のしたに花をかくす、あの白いスイレンを。

スイレンは、太陽のおよめさんになるやくそくをしていると、おおぜいのものがおもっていました。というのは、スイレンが、まいあさ、たいへん早く、きれいな花びらをひらいて、まっ白い、やさしいすがたで、太陽を見あげるからです。でも、スイレンは、そんなにえらいおむこさんを、心のなかでかんがえるほど、いい気にな

ってはいませんでした。太陽は、いつもスイレンの頭の上に、たかくたかくかがやいているばかりでなく、名づけ親ともよべないほど、年うえなのですから。そうです。スイレンは、なにも、そんな高いのぞみをもっていたのではありません。スイレンは、すぐ近くの岸に立っている、わかいシラカバと、なかよしだったのです。シラカバは、ながい、ふさふさしたまき毛を、スイレンがいつもうかんでいる水の上にたらしていました。

スイレンは、きれいなだけでなく、気だてもよく、えんりょぶかいたちでした。ですから、みんなにかわいがられて、おむこさんになりたいものが、一大隊もあらわれたほどでした。スイレンからあまり遠くないところに、アシのくさむらがありました。そのなかの一本は、ほんのすこしの風が、海の上を吹いていっても、そのたびに、スイレンにおじぎをしました。「わたしは、あなたさまの召使いでございます。」と、アシはいって、葉のさきが、水とすれすれになるほど、ひくく頭をさげるのでした。でも、スイレンは、そんな、とってつけたような、へりくだりかたは、きらいでした。このアシが、一ぽうでは、じぶんのまわりをおよぎまわっている魚たちにむかって、えらそうに、いばりかえっていることを知っていたからです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com